

「隨筆」対訳

「から」のでを用いる日本語原文とその中国語対訳

注:分類欄に記載されている記号は次の意味を表す。
A=「原因・理由を表すもの」、B=「接続機能を持つもの」、C=「無標」

会話文	地の文	会話文	地の文	対訳	作品	作者
	そこへ遙かの上から、ほたりと露が落ちた*ので*、花は自分の重みでふらふらと動いた。		其邦賈海徽議資主軀爲砧雜淮資, 宸雜隅咀彭洛附議凝疑楚, 戒痢痢仇紳士阻。	C	夢十夜	夏目漱石
	あれば安心だ*から*、蒲団をもとの如く直して、其の上にとっかり坐った。		殆勤叫癩懸, 屢祥替仇阻, ◆罌貝◆委委究No.圻栖榘劬懸控, 銘銘尿尿仇伺賃肇。	A		
	奥歯を強く噛み締めた*ので*、鼻から熱い息が荒くて出る。		◆喇詔◆劬詰阻兩血, 欄電議犯販頁映徑戰kk翌島。	A		
「負ぶって貰って済まないが、どうも人に馬鹿にされて不可い。親に迄馬鹿にされる*から*不可い」		“覚低嘘屢, 輝隼噴蛋湖仍, 徹頁鞭繫喇的勿危鞭音阻, 封岫動輒鞭伏幻牌議喇的, 鞭音阻陳。”		C		
	そうしてもう少し行けば分る様に思へる。分つては大変だ*から*、分らないうちに早く捨てて仕舞って、安心してはならない様に思へる。自分は益々足を早めた。		屢の, 歴吏念恠恠, 勿侑氏の軟禍議, 屢嗽狀誼, 匯種の軟禍朝, 厚頁音誼阻, 誼歴短の軟禍岫念, 鈞委委磨砲渠, 室詔折頁仇舞音通。罌頁屢園恠園諒。	C		
	自分は蛇が見たい*から*、細い道を何処迄も追って行った。		屢載の心敷, ◆寔◆之彭式抄匯岷疏味彭。	B		
	どうとう河の岸へ出た。橋も舟もない*から*、此処で休んで箱の中の蛇を見せるだらうと思っていると、爺さんはどぶどぶ河の中へ這り出した。		愁恠恠欺阻采眠。采頁短嘘播, 采円短嘘卷, 屢胡胡歴の磨寄古氏歴疾隅唯和栖, 委の前議敷斑屢朝阻否, 哈需折動動阜晴早晴仇膚邦佐序采邦載。	C		
	自分は廣だ*から*、腰を掛ける訳に行かない。草の上に胡座をかいていた。		屢頁拳族, 輝隼短嘘恠了, 哈頁歴課頁徒揚遇伺。	C		
	誰かが箸を継ぎ足した*ので*、遠くの空が薄明るく見える。		◆喇詔◆噴繫壓音廖仇吏詔語新耶会, ◆俟參◆瑛瑛李泊肇, 翁腎和頁嘸又裏裏窟疏議。	A		
	運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでみると云ふ評判だ*から*、散歩ながら行って見ると、自分より先にもう大勢集まって、しきりに下馬評をやっていた。		油察傍倅歴瘵忽紛議表壇仇廣祥震No. 屢鈞朽化岫寔, 涇霧朝朝, 哈需斷嘘俯謹繫與屢粹欺匯化, 歴推戰音廖仇伏寄味胎。	C		
	所が見て居るものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。其の中でも車夫が一番多い。仕待をして退屈だ*から*立っているに相違ない。		徹頁栖軀心議繫, 脅効屢匯劔, 昂頁字嶺扮議繫。風輪輸參概健肖謹。宸又概健彈頁吉核人吉詔返祖◆遇◆拍栖軀心議。	A		
	「能くあゝ無造作に鑿を使つて、思う様な眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心した*から*独自の様に言った。		“噲噲必履緩音音符特, 端谷才映復捷捷味仇因困仇震電栖陳。”屢套捲詔悶誘仇, 音動係互係驚軟栖。	C		
「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つてあるのを、鑿と槌の力で掘り出す迄だ。丸で土の中から石を掘り出す様なものだ*から*決して間違う筈はない」		“填, 椎音頁歴噲壺復震震端谷才映復。宸端谷才映復云頁托茄歴直岫嶺議, 歴溼揭頁処彭壺復才愒復議騰委端谷才映復還電栖意阻。宸伴必指响典新還電墳遊匯劔, ◆咀緩◆聾音氏電危議。”		A		
	自分は此の時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してそうなら誰にでも出来る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つて見たくなつた*から*見物をやめて早速家へ帰った。		屢宸扮嘉飾隼噴假歴: 假傍振, 祥頁宸拍指並宅? 屢の: 寔動必緩議三, 離音頁浪繫音氏喇! 罌頁, 屢勿強音式棋阻, 埔埔團編, ◆拒電倅呼震栖。◆葎緩◆, 屢音墜軀心, 枯語指社阻。	A		
	然し捕まへるものがない*から*、次第々々に水に近づいて来る。		音泊會返勿派假辛慶岫, 哈頁歴穢愁俊除邦中。	C		
	鏡に映る影を一つ残らず見る積りで眼を見張つてゐたが、鉄の鳴る響きで、黒い毛が飛んで来る*ので*、恐ろしくなつて、やがて眼を閉ぢた。		屢吃彭彭音演, 音班承復岷議嶺血息繫匯泣匯站, 徹頁偽偽壯且匯和, 菜葉議遊宿祥味彭敷電栖, ◆開◆屢岫栖岫錐錐, 俟參阻匯氏隅屢伴委演商故貧阻。	B		
	母の考えでは、夫が侍である*から*、弓矢の神の八幡へ、こうやして是非ない願を掛けたら、よもや聴かれぬ道理はなからうと一因に思い詰めて居る。		鈍神高棲仇? 伏, ◆慶華◆麗健頁冷平, ◆推批◆徐失宸担怒栖汝浩広文岷舞議伊隨屢派胎必採紗參隱噉, 寄古音氏音尖嫁議否。	A		
	子供は能く此の鈴の音で眼を覚まして、四辺を見ると真暗だもの*から*急に脅中で泣き出す事がある。		頃復吏更瓜槽踏崖伯, 鈔瀝李帶韻律匯頭那菜, 嘸扮◆寔◆壓鈍神唯貧因軟栖阻。	B		
	庄太郎は元來閑人の上に、顔る気作な男だ*から*、ではお宅迄持参りしようと思つて、女と一所に水菓子屋を出た。それぎり帰って来なかつた。		迤瀆隻云祥頁倅腕繫, 紗貧伏來褳繫訪醉, ◆寔◆傍祇: “惟挑, 屢逸低鎖指社肇否。”	B		
	そうして難問に出会つても存外どうにかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難問というのはきわめてまれた*から*である。		軸聞嗚欺佃購, 勿嬌電擊唳抗仇の限語限喝岫殆疑, ◆咀葎◆云栖弊貧頁自富嘘涙限局殆議佃購。	A		
	研学の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を請うてはいけない。きつと前途に重畳する難問を一つ一つしらみつぶしに枚挙されてそうして自分のせつかく楽しみにしている企図の絶望を宣告される*から*である。		椎頁頁親親寫議僕伏, 音勤煤隻kk遊辻殆器艦字議析弗擊涪縮, 唐氏委與歴念中議疑疑佃購, 匯倅音息仇才徒燬電, 開低斤徐失折栖繫參豚李議, 似迤亨祥繫柴木恢伏蒸李。	C		
	そうしてそれは、そのはじめからだめな試みをあえてしなかつた人には決して手に触れる機会のないような糸口である場合も少なくない。自然は書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、自然のまん中へ赤裸で飛び込んで来る人へのみその神秘の扉を開いて見せる*から*である。		宸嶽?, 沫, 俯謹頁椎又触遊祥音糊晦編議繫係涇限当欺議。◆咀葎◆奇僑軍氏頁椎又崩返祥伺互念kk腎術街紙又敷議繫議中念恠恠, 万率斃勁彭屢又權附黨因閨秘奇僑軍山宇議繫懸絀履失舞幽議寄噉。	A		
	頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。すべての行為には危険が伴なう*から*である。		遊辻推議繫辭裁尙答得社, 技載佃輝律佩強社。◆咀葎◆俟噉議佩強音味彭裡阻。	A		
	頭の悪い人には他人の仕事がたいへんな立派に見えると同時にまたえらい人の仕事でも自分にもできそうな気がする*ので*おのずから自分の向上心を刺激されるということもあるのである。		遊辻岳産議繫惠頁杯套斃繫議垢括提示, 摺扮嗽狀誼徐失勿嬌懶視權又疏寄繫麗議垢括。◆葎緩◆, 唐議繫序伏僑集榘校音僅誼欺爾潛才皇玲。	A		
	街道が大きい*ので*、人どほりがさう繁くないように思われる。		瞬祇載錐姓, 佩繫◆寔◆印詔運當。	B		
	ゆうべは豚の尻を撫でてやった*から*、今年は運が開けるだろう。		恍翁絡資硯罷阻忒頓徒, 書定縛氏恠挫墜否。	C		
	権きれを足にくくり付けてはる真似をする*ので*、童子どもはころころと轉がった。		唐斯委直瀉懸重資僑尙錯儲強否, ◆俟參◆計計砲音歴仇貧	A		

会話文		訳文		対訳	作品	作者
会話文	地の文	会話文	地の文			
	安料理の匈牙利グラシュが、一萬五千クロナである*から*、なるほど、「あそこの飯は少し高いよ」であった。		奉詔宴卷頓暇議組兩旋雲頓肖筆辺阻履1500針席。愆軍貞”推載議頓暇辛嗟泣酷免”!	C		
	食店のあるところから以下には間道がある*ので、僕はそれを下りた。		貫傾鋼俚懸岷佩吏和恠、噸議推雅搦、厘貞貞推載和議表。	C		
	然るに、明治の文学は西洋流を交えた*から*與謝野鐵幹さんあたりの国詩革新の念を急先鋒として、「あまき口づけ」といった調べの短歌なり新体詩なりが、幾つも出た。		音伯、辛順氣儀哈序廉別欠鯉、參羨仍動鐘孤俚窟竄議忽船翻仔開咏議讓拾俣、仲朔翹燕阻俯議”、”矢案議教恣”推創議嶽距僅議玉梧、仔悶齋。	C		
	接吻のことを漫然と書いて来て、sittliche Entrüstung という語を僕は聯想すべきであろうか否かとふと思ったが、それは恐らく無益であろう。大地震で日本はひどい目にあって、僕も少しはものあはれを感じたような気がする*から*である。		佚永祥俊稜諒詠亟阻蝕蝕、厘音岑祇乎音乎選”欺”祇响貧議誠信”宸倣簡、音伯宸嶽選”訊殿貞子斥涙吟議、寄仇實開晚云權難阻腎念墮個、厘勿謹富噸議泣”湖麗侏名”。	B		
	ただ僕は「口づけ」といふ日本語はどうもまづいと思って*から*、いまだにそれが気にかかっている。		音伯厘惠狀誼”教恣”宸倣晚嚙簡湊彎喪、③擬挽喉喉阻山。	C		
	ではなぜ我は極寒の天にも、特に溺れんとする幼児を見る時、進んで水に入るのであるか? 救うことを快とする*から*である。		推挑厘斯蓀焚担擬混絶鉅謙議諦賑賑、帶刺編鋪貞株議賑賑、勸慶強仇和邦羣屈照椿? ◆咀蓀◆扇照頁厘賑賑靜赤。	A	依儒の言葉	芥川龍之介
	今人は誰も古人のように幽霊の存在を信ずるものはない。しかし幽霊を見たと言ふ話は未だ時々伝へられる。ではなぜその話を信じないのか? 幽霊などを見る者は迷信に囚はれて居る*から*である。		③懸短噸繁”、硬繁推劔”、供啣議讓廣歷、徹貞瑞特械油欺噸繁傍心欺阻啣履。推担蓀焚担音”、佚宸嶽三椿? ◆咀蓀◆心欺啣瘦議繁頁難欺侮供議前駁。	A		
	ではなぜ迷信に捉はれているのか? 幽霊などを見る*から*である。		推担蓀焚担瓜痴供廉哈噸阻椿? ◆咀蓀◆心欺阻啣履。	A		
	第一紛らはしくて、似た木が多い*から*、はっきり種と分らせるように書けたとすれば、余程の腕前です。		暹仲、”貌議峯直載議、否隻詞聯、◆辰參◆、勸慶誼斑繁匯心祥岑括貞抱峯、祥誼嶽”輝議云並。	A	信濃の話	川端康成
	月見草や百合ですと、花の色や形は手帳に書けるでしょうが、花の大きさ、寸法を書き忘れると、それに似た大きい花や小さい花がいろいろある*から*まちがってしまいます。		祥傍勸仁柄”、賜為裁、軸開辛參酒芋仇亟電議議沖弼才忒春、勸貞梨阻亟雜議奇式、徑厘、◆咀蓀◆瓊噴光嶽光劍噴風”、貌議奇維才式維、◆勿◆祥何室吾危。	A		
	文学の話よりも木の話の方が気が楽であります*から*、ついでに信濃で天然記念物に指定されてある名木奇木の二三を言ってみます、……		曳軟氣儀議三初栖、峯直議三初厚紗煤防、◆辰參◆、俊彭厘祥勸傍傍壓伏欺瓜峽協律韻車射廷麗議會眉嶽兆峯誼誼。	A		
	この飛び離れてあるのが、植物分布学上から見て面白いといふ*ので*、天然記念物に指定されたのだそうであります。		宸嶽柳宜、貫斡麗蛋下儂貧嶺心貞載噸著議、◆辰參◆瓜峽協律韻車射廷麗。	A		
	繼つ子の、さすらひ人の、つむじまがりの、土臭い人情家の貧乏人の、反逆児でありました*から*、今日あらしめたならば、都人士のウイニング・スポオツや避暑を皮肉って、諷刺詩人となりまして、みなさんもこつぴどくやつつけられてるかもしれません。		◆咀蓀◆磨頁亨復、送惜”、行致”、興折丹才博繁議苑刺”、◆辰參◆、泌愆唐軟椿指伏、勿附祥氏遙逗那噸繁議番遜強才至遠聞苦、復律阻兆決伍頓繁、纏了勿勸麗欺好似阻否。	A		
	信濃から出た大文政家という*ので*、また上林温泉に別荘も持ってみたし、信濃には、この譯柳氏が字を書いた記念碑は多いようであります、……		◆咀蓀◆磨頁貞伏欺電櫃議議縮字購議奇繁麗、◆辰參◆懸賃梁畑勿魁擡、壓伏敵控”、勿噴俯謹射廷麗亟宸倣倣丈遭議付。	A		
	一茶の墓よりも三倍も四倍も背が高く、ありがたうに見えます*から*、うっかりしますと、一茶の墓の方はそっちのけで、この譯柳政太郎の方を拝んでしまう人がありようであります。		遇壓匯画長都議窺、心貧峯亟匯画議長勸互眉影蔚、◆辰參◆不音義禪、祥噸繁委匯画議長遡壓匯画隅、慮馮歌維夾遭層湊庶亟議議。	A		
	私の書きますものなどは、顔る非信州風、反信濃風ぢやないかと考へられます*ので*、それでひとつ信濃を書いてみようかと思ひ立って、三四年信濃を勉強してみるつもりで、去年からちよいよいよ信州へ来てるんですが、信州の人情風俗が好きといふわけでは決してありません。		厘亟議恬臨、首頁奇辛參心覆揭伏體欠鯉、郡伏敵欠鯉議宅? 辰參厘”亟匯亟伏敵、旺婚麻嘴眉彫定議扮寂檣儀棲伏敵、遇拜頁羣定祥扮械欺伏敵儂、徹宸倣音吭龍彭厘浪敵伏體議欠役繁麗。	C		
	菓亭の土地の人、つまり戸隠温泉あたりの人は、あなたの絵はただ貰うのもあまりありがたくないというわけで、便所の壁や襖の破れに貼ってあるが、値が出たのに驚いて、勿體らしく持ち出したものだそうで、そんな風だ*から*、いい絵は殆ど故郷に残っていない。		惣佑議社”繁、軸薩咨梁畑匯揮議議、狀誼低議歟貞動議議、勿音氏遠寇炬、祥暢柄間噸俚議能詢才脛壇議篤狹、遇斤原熱宜載邦表、瑞音參蓀集仇壓繁念辰駁、◆辰參◆、◆秘緩、惣佑議控敵”啣音短議壓駁”。	A		
	一茶の柏原よりも下々の下の不毛の地だったんでしょう*から*、大名の参勤交代もなくなり、……		宸夷匯画議椅珂厚頁吉遇和岷議音谷岷仇、◆辰參◆勿短噸寄兆駁貞陸能送敷幣。	A		
	月の名所としては確より焼山が昔から名高く、新古今集以来和歌にも、また俳句にも盛んによまれて、一個の小文学史を作ってるほどです*から*、それだけでも終わりに触れておくつもりでしたが、時間がありません。		恬律浜坻議覆仇、”普表係梧曳騶勝瓊電兆、壓”仔硯書麗”參摺議才梧參式拿輻戰昧佩字帶、眠音謹更境阻匯何”式獵儂券、◆辰參◆、厘云”恣朔祥議壁霧霧、徹斯將短噸扮寂阻。	A		
	私はこの言葉に惹かれます*から*、自分でもよくこの言葉を揮毫します。		厘蓀宸鞘三促噸強、係失勿械械藝亟宸鞘三。	C	美しい日本と私	川端康成
	西洋の庭園が多くは均整に造られるのにくらべて、日本の庭園はたいいてい不均整に造られますが、不均整は均整よりも、多くのもの、廣いものを象徴出来る*から*であります。		廉劉議優堪寄音秀步誼斤各讓討、”曳岷和、晚云議優堪誼違音秀步誼首斤各、宸賜俯◆頁咀蓀◆首斤各曳斤各齒噸厚謹、厚鴻議画尤吭龍。	A		
	海工による人工ではなく、窯のなかの自然のわざです*から*、窯変と言ってもいいような、さまざまな色模様が生まれます。		万音貞麗後音垢議返暈、遇貞麗後劫駁議係集紗垢、◆辰參◆賦伏阻辛各律”劫延”議嶽嶽雜駁。	A		
	少なくとも、わたくしはこれまでに見たことはありません*ので*、「一期一会」と言えるかもしれません。		幅富、厘肉書陸炎需伯、◆辰參◆勿辛參傍頁”峠伏寂需”。	A	美の存在と発見	川端康成
	まあ平凡な教訓めいた受け取りようをされるおそれがあります*ので*、この一句だけではとまらぬほの句を添へて揮毫しました。		厘發伏瓜輝擡折伏械露檣俊麗、◆辰參◆、載噸囑哈宸宸匯暹我癖暉倦、宴噸屍坐紗袋風磨議議駁。	A		

会話文		地の文		訳文		対訳	作品	作者
		是れなどは「論より證據」で、学問の方が誤っているとも云えるが、寒地と暖地によって花の発育に差があるかも知れず、同じ木の中にも特異性があるかも知れない*から*、或る土地で、或る学者が見た或る木の花は、二寸乃至三寸の長さ止まっていたとすれば、学問上の記載が必ずしも誤りだとは断ぜられない。		宸痛頁*並糞覆器崎胎、勿辛參傍頁僂宝噉列。傍首協員混揮嚙梁揮岷音撰擬崑維施窟箇音議眠吹、傍首協員損匯嶽峯勿嘸蒙吹來。必惚蝶僂*壓蝶仇心欺議直儲維哈囉屈眉雁海、冥首嬌僂倭尙寶貨議芝墮頁危列議。		C		
		人が花や鳥獣を愛するの、其等の物を擬人して眺める*から*である。		繁◆感促參◆握維施抵誦、勿◆頁律阻◆斤方斯恬亭察晒議切浜。		A		
		桜を中心にしてあこがれて居た春は余りに呆気ないものだと、どの年の春にも悔みながら、やはり春と云うと、桜が重要な目標になる*から*可笑しい。		虽然每年春天人们都抱怨自己憧憬的以樱花为中心的春天过于乏味、但一提起春天又总是把樱花作为重要目标。着实可笑。		C		
		人間は「忘却」と云う「期待」と云う自己催眠法を知っていて、この二つを無意識に使い分ける*ので*、長い哀愁も実はそう長い刺激を持たず、短い歓楽が却て長い楽しい思出になったりもする。		人还懂得一曰“忘却”二曰“期待”的自致催眠法、并能无意识地分别使用这两者。◆于是◆长久的哀愁实际上也不具有那么长久的刺激作用。短暂的欢乐却反而变成了长久的回忆。		A		
		下宿の中庭に瓢箪の形をした池があって、池の中には木や竹の屑が一ぱい散らばっていた*ので*、私はこれに鯉を放つのを不安に思ったが、暫く考えた後で失張りそうした。		房东家的当中院子里，倒是有个瓢瓢状的水池。可上面浮满了乱乱的树枝和竹片，把鱼放生在内，我不放心。		B	鯉	小懸沢屈
		その年の冬、私は素人下宿へ移った。鯉をも連れて行きたかったのだが、私は網を持っていなかった*ので*、そうすることは出来なかった。		輝定喬爺、厘算阻匯社音械辺廖翌繁議型叫、輝扮載*委弱匯匯軟揮恠、辛頁短噉威利、◆哈挫◆適和。		B		
		はじめの日、二ひきの小さな鮒を釣りあげた*ので*、之をその下宿の主人に見せてやった。		及匯爺、許資猶會訳式誦誦、厘鎖公型叫折匠心。		C		
		青木の蓋が彼の愛人を誤解してはいけぬ*ので*、こゝに其の全文をかゝる。		葎開様直議瘦至音崑列盾磨議隆脂墨、蒙讀乎供昂飄芝村壓緩。		B		
		琵琶の実はずでに黄色に熟していて、新鮮なる食欲をそそった。そして池畔の種々なる草木は、私の体を二階の窓からも露の上からも見えなくしていた*ので*、私は釣竿を逆さにして、琵琶の実をたたき落した。		葎非議惚蕪斷符仔母、貫遇哈軟厘*晦晦互他議奮窟。遇伴学渡議光嶽議直島音海誼互侮誰音、象匯賦質、音賦頁貫促貨完筒匱、瑣頁貫刺岷音、資源隈心欺厘議附啞、◆咀緩◆、厘宜燐彭許戸、委葎非議惚蕪巴總和植。		A		
		ところが鯉は夕方近くになって漸く釣ることが出来た*ので*、つまり私は随分多くの琵琶の実を失敬してしまったのである。		◆喇阻◆岷欺仔肢扮蛋嘉繡弱礙許資猶、◆促參◆厘釣字秒俗郭阻*”輝議議室葎。		A	伊豆天城	川端康成
		私は失職していた*ので*、この見物は私にとって最も適切なものであったのだ。		緩扮、厘屋壓誦匱、宸嶽歌岷、斤厘梧傍權頁誼我癖音猶阻。		C		
		或る夜、むし暑い*ので*私は夜明けまで眠らなかつた。		匯爺仁絡、糞壓彈犯音狛、厘匯仁隆鋒岷欺詭字。		C		
	「……そんな姉さんでござんすのに、妹の富士山は姉さん思ひて、毎日伸び上って屏風越しに姉さんを見ていました*ので*、日本一の高い山になったんでござんすよ。」		……勝賊純純宸劍、辛源平表殿嚴*廷純純、耽爺音早海億億、甥伯德疼冥李純純、◆促參◆祥延擬晚云悠互議表阻味。”		A			
		……とにかく、日本の舟と伊豆との因縁は、いろんな時代に記録を残して、透からぬものだ。勿論これは、伊豆が海に突き出た国だ*から*だ。		惠岷、晚云卷哈才狹議咀咆、應光傍扮旗音嶽和阻芝村、辛僚付彼送海。輝隼、宸頁◆咀葎◆狹汎職岷早今円。		A		
		うしろは富士、足柄、箱根の山々に取り囲まれている*から*なほ、この黒潮の海に立ち昇る水蒸気が半島を豊かに潤し、伊豆全体の火山岩をぼろぼろ砕いて肥えた土地とする。		◆咀葎◆嘘中律汎彭源平、怎忽、功議表陣、◆促參◆、邦對甘貫哲送議今中幅軟音、劉蛋儀非影議戲、聞厘倅狹議語表*計計哩哩、晒擬阻泉琳議興仇。		A		
	「名物は山葵と椎茸さ。天城の山葵は日本一という自慢で、東京のいい料理屋へ出る*から*、この山葵澤はなかなかの財産だ。……」		“嗷兆議蒙岷頁表轉才”、髮葎、爺席議表轉、係擲律晚云及匯、畏官阻叫袋議互半架愈、★促參★、宸職議表轉悠仇頁匯永字鉸議夏源。		B			
		なぜこの池にこんな蛙がいるのかという、土屋校長（湯ヶ島小学校）の説明によれば、八丁ヶ池には井守が多い*から*、池の中で産卵すると皆食われてしまう。		葎焚担宸倅字厘岷嶽嶽養葎*象奧型丕海(明戯式僂)議盾盾、宸◆頁咀葎◆伊供学岷載謹膺驚、糞養岷字岷軟耐祥瓜郭渠阻。		C-1	花は眠らない	寒極慎撓
		花は眠らないと気づいたのも、宿屋にひとりいる私が、夜なかの四時に目をさました*から*かもしれない。		勿俯、◆尿咀葎◆厘鏡係厘岷壓岷岷岷、旺壓爭蛙4位位栖、◆促參◆祥窟⑩阻雜陰蓄。		A		
		四五人で組んで行くのだが、一人が二十五圓とかいう話だった*から*、伊豆では伊東のゴルフ、これは会費三百圓の外に雑費百圓と本に書いてあったが、まあ二つとも贅澤なスポオツだ。」		膨助倅繁匯快、象傍匯繁25袋。慕資岷影、卅叫議互極健白魁、芽阻宿300氏氏岷岷、璣助宿100袋議増離。匯卅狹、宸會賦祥麻頁互動繼議問問強阻。		C		
		つかれている*ので*早く寝た。		厘斷將藤岷音唇阻、◆祥◆盡盡貨阻竟。		A		
		近頃不図思い出して、あゝして置いたのは転宅の際などに何処へ散逸するかも知れない*から*、今のうちに表具屋へ遣って態物にでも仕立てさせようと言う気が起った。		除酒塞軍芝軟、狀讀宸劍慧葎、飛頁岷倅衣瀟繼下岷並、不匯音風、冥音岑氏終岷壓担仇走。◆促參◆、表養表万僕欺駱冊糾葎、駱匯駱傳航軟。		A	子規の絵	歪朕明墳
		お袋の愚痴を聞くのが嫌やだ*から*、わざわざ出かけて行こうという気持は随多に起さない。		音狛厘鳩糞音塔油鈍牌議湯湯、◆促參◆載當*解設指社心幸。		A	おふくろ	井伏鱒二
	「この家のものは、男が早死にする*から*、お前も気をつけて」		“壘斷社議繁、視倅頁頁盡棒、低勿動廣吭兔。……”		C			
		敷地は底が岩盤だ*から*木の育ちも悪く、五十年前にひよろひよろしていた松の木は未だにひよろひよろである。		★喇阻★優坊議仇和員頁*墳、峯勿音翌伏海、助噴定念議惟臣豐海議防峯、岷書挽集岷岷岷。		A		
		裏山が酉陽を早くあげさせる*ので*、菜園畑も日陰になっている間が多く、ここに出来る作物のうち唯一の自慢の種はコンニャクだけである。		◆喇阻◆廉式議剩高盡葎祥瓜嶺表葎、岷岷岷岷高字議扮岷載玉、宸職話岷岷、幸匯時誼推動議祥頁轉。		A		
		庭に三つの小さな池がある*ので*湿気が多く、……		院子里有三个水池、◆所以◆相当潮湿。		A		
		但、映画の場合は第三者が介在するのだ*から*私は意に介さない。		不过、改编成的电影、◆因为◆有第三者插手、◆所以◆我并不介意。		A		
	「倉の二階にまだ書画があるかしらん。あれはみんな偽物だ*から*、もし人に売らるなら、偽物は偽物として売った方がよいのじゃないかしらん」		“均型議屈促資岷岷岷岷岷岷*惟音頁耶叫屨、動頁沢公艶察、辛軟岷岷議議。”		C			
		「女によって人間性と和解」しようとした*から*、ストリンデルの恋愛悲劇は起つたのである。		◆尿咀葎◆帽蒙爽韻*“有狛湖岷岷岷來才盾”、◆促參◆嘉窟伏阻揮丑丑。		A	末期の眼	川端康成

		訳文				
会話文	地の文	会話文	地の文	対訳	作品	作者
	悪人というものは、ぼくににとっては案外始末のよい、付き合い易い人間なのだ。という意味は、悪人というのは概して聡明な人間に決っているし、それに悪というものの自体に、なるほど現象的には無限の変化を示しているかもしれないが、本質的にはおのずからにして基本的グラマーとでもいうべきものがある*から*である。		僂僚具繁、斤厘栖傍、頁自挫斤原、叟器住史議繁。辰嗣傍、◆頁咀律◆具繁寄音頁權字繁、遇拜具議云附、勿俯議鳩壓①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿。貧格⑩電涙博勝議延晒、徹壓云嶋貧拔術噓風児云圻夸。	A		
	それに反して、金が好きで、女が好きで、名誉心が強くて、利得になることならなんでもする、という人たちはほど、ぼくは付き合いやすい人間を知らぬのだ。第一、サバサバしていて気持がよい。安心して付き合える。金が好きでも、ぼくに金さえなければ取られる心配はないし、女が好きでも、ぼくが男である限り迷惑を蒙るおそれはない。名誉心が強ければ、どこかよそでそれを掴んでくれればよいのだし、利得になることならどんなことでもするといっても、ぼくに利権さえなければ一切は風馬牛である。これならば常に淡々として、君子の交りができる*▼*から▲*である。		郡岬、厘音岑祇曳控熱、控粥、兆圍湖膿、半旋頁夕議繁、厚否叟住史議阻。遍粹、孤廠訪靜、伉秤德芥。辛參伉芦尖誼仇住吏。勝砧握熱、厘錢熱音短噓、勿祥音喘殺伉瓜裕；勝砧控粥、厘頁視繁、祥音喘嬰殿耶醒軍；勳頁兆圍湖膿、祥音喘噓焚担委凹瓜厘應膠；軸寔率旋頁夕、厘錢蒙幅音短噓、祥匪併音欠瀧釘音*式。勳頁宸劍、祥音參攪律記記議墟俚岬住。	C		
	無私、無欲、滅私奉公などという人間にいたっては、ぼくは逸早くおぞ気をふるって、嚴重な警戒を怠らぬようにしてきている。いいかえれば、この種の人間は何をしてかすかわからぬ*から*である。		岷器淚暴、淚圍、針失月巷議繁、厘禽扮祥賄誼憐貉、互業巡姥、音糊噓某坐毫機。算岷岬、厘音岑祇宸嶽繁氏孤電焚担極。	C		